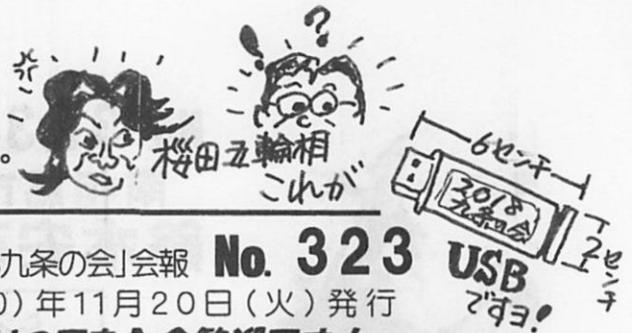


○ホームページ:「はらまち九条の会」で検索してご覧ください。  
「会報」も2005年の創刊から最新号まで読むことができます。



## 九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No. 323

2018(平成30)年11月20日(火)発行

どなたでも、いつでも入会歓迎です!



- **はらまち九条の会** は、戦争放棄の憲法第9条を護って「戦争をしない国・日本」をめざし、支持政党などを問わない自由な市民の会です。
- 05年12月結成。会員は南相馬市原町区を中心に418名。年会費千円
- 3.11の大震災後、「事故の福島第一核発電所(原発)に世界一近くで活動できる“九条の会”」を自覚し、「日本国憲法の草案を起草した憲法学者鈴木安蔵(小高区)の故郷の“九条の会”」を誇りに活動しています。

## “安倍9条改憲NO! 署名” 331筆 集まる

11月3日(土) サポセンフェス同時開催・あきいち2018

本会の集約署名1,500筆に

報告: 事務局長・早坂吉彦



11月3日(土) 8時30分より、原ノ町駅前から四つ葉交差点まで歩行者天国区間として、「あきいち2018」が開催。その中で「第8回 サポートセンターフェス」が同時開催となり、**はらまち九条の会**も出展しました。

昨年秋は「線量計が鳴る」(作・出演中村敦夫氏)の公演実施に力を注いだため「あきいち2017」には不参加でしたが、今回は事務局のメンバーの他に、会員の菅野正勝さん、角田靖夫さんも応援に来てくださり、また「市民サポートセンター」の職員の皆さんにもいろいろ面倒を見てもらい、なんとか無事に大成功のうち

▲次々に「改憲反対署名」に市民が訪れ、  
本会のブースは大賑わいになりました。

ちに終了することができました。私達の署名呼びかけに、あるお母さんらしい女性が私達を横目で見ながら大声で「憲法なんかの前に地震だよね」と話し、一瞬、エッと思いましたが、今もっともこの言葉、安倍さんに聞いてもらいたかったです。

## ふだん憲法に関心のないような方々が署名を 報告: 事務局・番場恵子

11月3日当日は、とても気持ちの良い秋晴れで、駅通りは大勢の人でにぎわいました。私たちのブースは、「市民活動サポートセンター」主催のスタンプラリーの1ブースとして参加させていただいたお陰で、例年に比べてはるかに多くの方に立ち寄って頂けたのです。スタンプゲットをきっかけに、「9条改憲反対署名用紙」をみるみるうちに埋めてくれたのです。特に子連れのお母さん、年配の方、子供たちなど、普段はあまり憲法に関心を持たないであろう人たちですが、署名してくれました。

私たちは“ピースナイン(憲法9条) コーヒー”を手渡しながら、「戦争は絶対嫌だよね」「お子さんやお孫さんたちを戦争に行かせたくないよね」「そのために憲法9条は大切に護っていかねば！」と声を大きくして訴えました。そしてこの日一日で331名もの署名を頂き、これは私たちの予想をはるかに上回る数でした。

また、福島第一原発に45年間携わってきたという方が、「もう辞めたいが辞めさせてもらえないよ」「内部のコンクリートがボロボロのまま放置されている現状で、また必ず事故はあると思うよ」などと話されていました。サイドに立てたパネルには、朝倉悠三さんの「震災絵日記」、若松丈太郎さんの福島民報「ふくしま人・鈴木安蔵」の展示などいろいろ試してみました。

「戦争が絶対嫌な人」がこんなにたくさんいるのに、私たちは今まで、すんなりとは声を集めてこれなかった気がします。これからは、せっかくのこの体験を活かして、「伝えるチャンスを広げてゆ



くため、多くの方が気楽に話を聴いてくださる方法」も探していかなければと思いました。

# 南相馬市出身 “憲法の間接的起草者” 鈴木安蔵 故郷の小高を懐かしむ



SUZUKI Yasuzo

▲鈴木安蔵（すずき・やすぞう）

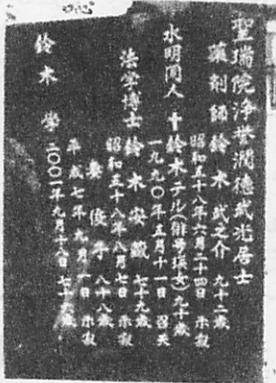
○1904（明37）年3月3日生、1983（昭58）年8月7日、79歳で没。

○小高小、相馬中、二高から京都帝大へ。45年に憲法研究会に参加し「憲法草案要綱」を起草、それが現憲法のもとになる。静岡大、愛知大、立正大の教授を歴任。



▲鈴木安蔵の生家。今年、文化庁の登録有形文化財の指定を受ける。（小高区仲町はやし薬局）

3年前に吉名から移され、墓誌には安蔵も明記されている。



SUGIYAMA Motojiro



HIRATA Yoshie

▲上は、小高教会牧師で、日本農民組合創立者の杉山元治郎。代議士になり、戦後は社会党から衆議院副議長になる。下は、昭和初期の社会主義運動家で、小高区金房の開拓を推進した平田良衛。

## ふるさと「小高町」のこと 鈴木安蔵

わたしが生まれたのは福島県相馬郡小高（おだか）町、海岸線の北の方の平凡な町である。中学からやがて大学と町をはなれたから、ふるさととはいえ、幼いときの十三、四年の環境である。だが、戦争中は家族が疎開したり、祖先の墓もむかしながらの郊外の吉名の丘にある。まぶたに浮かぶのは、なによりもさきに、この丘のあたりである

「見返れば墳墓は見えす蟬しぐれ」——これは小学校時代の句だが、郷土は俳句でよく知られたところ、大曲駒村、豊田君仙子、半谷絹村など今日なお記憶されてよい人びとがあり、今日でも「水明」派の一支点である。わたしたちも小さいときから、俳句に親しんだ。

俳句が盛んな土地であることの根拠をしいて求めると、観光地向きの名所とてもなく、西になだらかな阿武隈山脈が走り、東に近く波荒い海岸がづらなる。産業といえば、羽二重、生糸の小産地であったにすぎず、今日なお、逆にそれが幸いしてか、公害やけげばしい観光地開発もない静かな小天地であるという事情かもしれない。大正年代の全国的な小作争議も、ここにはおこらなかった。日本の農民運動の草分けの一人である杉山元治郎氏は、小高の若い牧師であり、わたくし自身その教会で教えを受けたが、農民運動、労働農民党の指導者となって氏が活動したのも、小高をはなれてからである。

だが、必然的な社会的矛盾がないのではない。先覚者平田良衛さんの開拓地の苦心に示されるような働く農民の苦難が生まれたし、町民大衆のインフレによる苦悩もある。野馬追い祭りでも知られる近くの原町市や浪江などにおける工場進出による諸問題も、国鉄労働者の組織とともに、もっと今日的な郷土の再建を生み出す原動力になろう。

（1973（昭48）年5月13日付新聞「ふるさとじまん」若松丈太郎氏編集の「相馬地方の人物・資料」より）



▲現在の南相馬市小高区。JR常磐線高架橋から町並みを望む。事故原発から20キロ圏内で避難地区になり、2016年7月に指定解除。帰還者は少ない。

○若松丈太郎氏（南相馬市・詩人・本会会員）執筆の「福島民報」「ふくしまん・鈴木安蔵」が、①10月27日・②11月3日・③11月10日・④11月17日・⑤11月24日に連載され、大変好評です。